

以降は私のレポートを淡々と記述していく。タイムリープをまたぐと記録は散逸してしまうため、私の記憶頼みになるが、時系列順、もとい「試した世界」順に列挙する。

欲望の実践①／有名芸能人

その芸能人は元アイドルで、好きな顔を上げるような下卑た週刊誌のアンケートでは常に男女とも高スコアをたたき出すような万人受けする王道美少女だった。最初はわかりやすく難しそうなところを攻めようとした私は、その芸能人――仮にAとする。Aをまずレイプしてみることにした。

一度目はまず、SNSやネットの情報から断片的に入手した情報をもとに自宅をリサーチし、仕事で遅くなる時間を狙って夜に襲った。これは拍子抜けするほどあっさり成功した。「のちに捕まることをリスクと考えなければ」いまの世の中でも犯罪は容易だ。監視カメラがいくら増えようが、リアルタイムでのレイプは止められない。ゆえに、今の社会は、前時代と比べて相対的に「無敵の人」天国であるとも言えるだろう。そして私も、失うものがない人らと比べて別のベクトルで「無敵の人」だ。私はスタンガンで気絶させたAを少し離して停めてあったワゴン車で連れ去ると、自宅に持ち帰った。

自宅にはあらゆる「道具」や「薬」をそろえた「部屋」を作っていた。当時はまだ試行回数が少なかったから、効率よく感度を高める注入薬や、脳を電極刺激して意識「以外」を不随にする装置等、のちに導入される設備もまだ揃ってはいない状態だったが、それでもそこらのレイプ犯とは比べ物にならないほどの凶器がそろっていた。

さて、Aを「部屋」にあるレイプ用ベッドに横たえた私は、まず意識を取り戻す前に、一度味わうことにした。すぐに起きないように、比較的軽めの麻酔薬を注射する。素人が麻酔なんかして死なせたらどうするという話だが、タイムリープをすればよろしい。

目の前で見たAは、なるほど、時代を代表する美女と呼ばれるのも頷けるような、ととのった造形をしていた。整形痕のない大きな目、過度に主張しないが美しく通った鼻筋、ぷりんとしたピンク色の唇。白い肌にはうっすら汗をかいている。私は我慢できずに自分の口で唇をこじ開けた。

口内が官能的な刺激に包まれる。舌で舌をまさぐり、搾り取るようにして溜まっていた唾液と絡めて、Aの「味」を楽しむ。なにごとく初めては尊いものだ。無防備の女にそんなことをするというだけで、私の興奮はすでに最高潮にあった。股間の奥がツンと切なくなり、興奮が脳裏ではじけ飛ぶ。私はそのまま彼女を脱がし始めた。情緒もへったくれもな

く、だらんと気を失った女から、勢い、衣服のすべてをはぎとった。下着を楽しめばよかったと気づいたのはそのあとで、しかし、私にはもう冷静な段取りというものなどどうでもよかった。怒張したそれを、彼女に突っ込みたかった。

彼女の股間に手をやると、そこはすでにしっとり湿っていた。感じていたわけもなく、防御反応というやつだろう。しかし私はそうとわかっていてなお、ひどく興奮した。白く、まだ誰にも穢されていないような(実際は知らない)両の乳房を乱暴に揉みしだきながら、屹立した陰茎をAに握らせる。彼女の膣内を指でまさぐっていると、次第に彼女の身体は熱を帯び始めた。そして

「う……ん……？」

「ぎゃ！！！！！！！！！！」

彼女は実に素敵なタイミングで意識を取り戻した。

最初の一言を、知らぬ男の指を膣内に挿入した状態で発しているのだから面白い。

「だれ！？！？ どこ！？！？ ええ！？！」

「いやああああああああ！！！！」

なるほど、気絶させて連れ去る場合、状況を飲み込めなくてこうなるのか。少し、だるいなと思った私は、彼女に対して特に何も答えずに、彼女の腹を思い切り殴りつけた。

「おぐ」

テレビでは聞き覚えのない、汚い獣のような音を口から出して彼女は弾け飛んだ。

今回の周回における私はさほど筋トレなどしてきた体ではないが、長いタイムリープの中でそこそこの格闘スキルは身に着けてきた。が、少なくとも手合わせや試合以外の場で、一般的な体形の、しかも女性を殴りつけたことなど一度もなかった。ゆえに、彼女の身体は私の感覚以上に軽々しくはじけ飛んだ。

壁に当たり、さまざまな「道具」をまき散らして彼女はその場に崩れ落ちた。いまでもやはり白く美しい身体をぶるぶると振るわせてうずくまっている。恐れからか、こちらを見ようとはしない。私は、コブシに残った彼女の肉の感触を反芻した。やわらかく、そして官能的だった。私はますます股間が怒張していくのを感じていた。

おびえるAに一步一步近づいていく。彼女は小さく声を上げたが逃げ場ない。

欲望の実践②／通りすがりの女子校生

いつも通り最短ルートで築いた財を使った豪邸に住み替えた私だったが、趣味としての、実験としての、茫漠とした時間と向かう禅問答としてのレイプを初めてからは、地下室の整備が必須事項となった。そこにはレイプのための部屋だけでなく、女を監禁する部屋や、ときに必要に迫られて殺害する部屋、そして、もっとも大事なアイソレーションタンクも設置されている。

だが地下室を備えた豪邸を建築した最初の周回において、私が探求したのはライブ感のあるストリートレイプだった。

道すがら出会った女にムラっときたら、チャンスをうかがって犯る。

それは実行こそ簡単に思えたが、少々リスクを抱えていた。

現行犯で捕まってしまったら、アイソレーションタンクへ帰り着くことができず——ともすれば、ただの「詰んだ人生」を生きることになってしまうリスクだ。

ゆえに俺は細心の注意を払い、慎重にレイプを行った。それはまるで、一度きりの人生を生きているかのような緊張感だった。

その女子校生を最初に見たのは、午前中のあるターミナル駅だった。レイプ活動と並行していた、この能力に関する文献の調査のため、私はその駅を訪れていた。その折、すれ違いざまに目の端で捉えたその若々しく瑞々しい肢体に、私は目を奪われた。

マスクなど必要としない、澆漑とした生命力と張りのある肌。肩のあたりまで伸びたしなやかな黒髪ロング。香る甘酸っぱい香り。歩きスマホするわけでもなく、颯爽と駅構内を闊歩していく。

私はその場で言いようのない衝動に駆られた。すでにAを犯した記憶があったために、獲物となる女を力づくで我がものとする快感が脳に刻まれていたのだ。しかし——リセットが効く「無敵の人」だからと言って、白昼堂々いきなり襲っても周りから取り押さえられる。私は彼女のあとを付けた。衝動的な火照りを決して失わぬよう、心と目をギラつかせて。そして機を待った。

得てしてタイミングの妙は悪魔の側に与するものである。

彼女との遭遇は土曜日であり、彼女は部活動のため登校していたのだった。

そして私の服装は種類としてはオフィスカジュアル程度の清潔感あるもので、つまり学校